

べんざいてん まつ ものがたり ほんまち
弁財天と松の物語（本町）

むかし むかしの

岸の和田の土生はなの里

それは それは 美しい

美しい 松があったとさ

あったとさ



村人はその松の前を通ると喜びを感じ、子どもや犬

や猫までも喜びを感じ、松の前を行き交かっていまし

た。

ある日、太郎兵たろうべえと彦兵ひこべえがひょっこりと松の前で出会

いました。

「やあ 彦兵 どこいてきたな。」

「ちよっと浜まで イワシ取りに、や。」

と、太郎兵と彦兵はイワシの入ったびくを見て、

ててか
「手々噛みそなイワシや。」

と、笑いながら松を見上げました。

「いつ見てもこの松はうつつくしのお。」

「ちよっと、おがんどこ。」

と、ポンポンと手を合わせて、お辞儀じぎをして別れまし
た。

これがこの村の人たちの暮らしでした。

犬もおしっこをしようと片足を上げますが、その場

所がああ美しい松だったので、あわてて別の場所に行

きました。

猫も盗ぬすんだ魚をくわえて、「魚どろぼー 返せー」と

子どもに追われているのに、松の根元ねもとに魚をおいてお

辞儀してから逃げました。これが、松の前の毎日の風

景でした。

ある日、杖を突いて腰の曲がったおじいさんがやってきて、松の前で何やら熱心に拝み始めました。

そこへ、二人連れのおばあさんがやってきて、

「じいさん、いつも熱心やの。」

「わし、この松を拝みたいよって、だれぞ、ここに祠つくってくれんかのう。」

「ほら、ええ思いつきやなあ。」

と、二人は喜びました。が、も一人のおばあさんは、

「祠作るのには銭がいるで。」

と、ちょっと渋りました。銭はみんなに寄進してもら

うとして、祠造って、何を祀るかということになり、

「家内安全や五穀豊穰を願うよって、弁財天さんやな

あ。」

「この松、美して、弁財天そっくりやな。」

「弁財天祀ろう。」

ということでは里長の保近様に願い出て、弁財天を祀る

祠を造ることにしました。

村の人たちが力合わせて、木を切ったり石を運んだりして弁財天を祀る祠ができました。

生まれた祠

春 山に登れば 若菜を供え

秋 稲が実れば 初穂を供え

たいせつに たいせつに お祀りし

いつしか 里の人たちは

弁財天の松と 呼ぶようになりました



祠を造ってからは豊作が続ぎ、村の人たちは前にも

まして働くようになりました。田植えの時期には大人

も子どもも横一列に並んで、苗を植えていきました。

縦に横にときれいに筋の通った田んぼの上を風が

さわさわと通っていき、稲がすくすく育ち、黄色く色

づくと、村の人は田んぼを見てニコニコしました。

「今年も豊作やなあ。」

「ほんまに弁財天の祠、祀ってから、ずっと豊作やな

あ。」

「おかげでわしらの暮らしも楽になったなあ。」

「弁財天の松 ひまひま 様様やなあ。」

「様様や、拝みにいこ。」

と、言いながら松の前を行き交っていました。

ところが、この年は稲が実り、もうすぐ稲刈りをしようというのに、様子が変でした。いつも晴れ渡っている空に黒い雲が出てきました。

「あれ、おかしいな雲が出てきよった。」

「ほんまやのう。」

と、天を仰いでいる二人の口に、
あまつゆ
雨粒がぼつりと飛び込みました。

「あっ、雨や。」



「ちようどええ、おしめりや。」

と、呑気な事を言っていたのですが、雨は止まずに、
のんき

何日も何日も降り続けました。田んぼにも水が付き、

池のようになりました。

やっと小降りになったので村人が田んぼへ来てみると、なんと稲がみな水につかり、こけていました。

「こらあかん、はよ水はかさな。」

「こけてる、はよ起こさんと芽がでるわ。」

と、村人は大騒ぎでした。

心配して見回りにやって来た里長の保近様に、

「里長様。」

「保近さま、このままじゃ稲が。」

と、村人は口々に訴えました。

「そやさかい、今、村のもんみんな、稲起こしをするよう言うて回ってるんや。」

と、言う保近に、

「おらの田んぼ一番に頼みます。」

「何 いうてんや おらの田んぼや。」

と、争う村人に、

「喧嘩けんかすな、こんな時こそ力あわさなあかんのやで。」

と、止めに入り、村人を集め、大人も子どもも出てきて、田んぼに入って稲を起こし始めました。

その時、遠くから馬の蹄ひづりの音が聴こえてきました。

「馬や。」

「馬が来るぞ。」

「こんな時になんの知らせや。」

と、保近の心に不安がよぎりました。

村人が一つに固まると、役人は馬の上から

「里長はおるか。」

と、言いました。

保近が、

「里長の保近にございます。」



と、名乗ると、

「帝みかどが熊野にお詣りまいのため、当地をお通りになる。道筋をよう整えておけ。」

と、お役人は下知げちしました。

「え、こないな雨やのに。」

と、言う村人に、

「だまれ。帝はもう京を出ておられる。十日もすればここに来られる。雨が降ろうが槍やりが降ろうが予定通りお通りになる。良いな。」

と、役人は言い放って、去さっていきました。

保近は不安になりましたが、

「帝はんで、どないな格好してんやろ。」

と、面白そうに騒さわぎ始めました。

「騒いである場合やないで、誰か津田川見てこい。」

と、保近が言ったとき、急を知らせる半鐘はんしやうが響き、津

田川の方から、

「橋が、津田の橋が、流されそうや。」

と、叫びながら人が走ってきました。

村人は一斉に川に向かって走りました。保近も

「川に近づくなー。」

と、叫びながら後を追いました。川は「ゴーゴーと逆巻さかまいて流れ、橋はぎしぎしときしんでいました。

「ものごっついなー。」

「橋、流されそうや。」

と、村人は眺めるだけで足がすくんでしまいました。

「こらあかん、この橋あ古なって、土台もぐらついち

やある、橋流されるわ。」

と、保近がつぶやきました。

「橋、流されて、帝はん通られへんかったらどないな

るんや。」

と、騒ぐ村人に、

「お咎め受けるに決まってる。」

と、保近が言うと、

「どんなお咎めや。」

と、村人、

「わしの首が飛ぶ、わしの首だけやったらええ。」

と、言う保近に村人は、

「橋なおそう。」

と、詰め寄りました。保近は、

「十日しかあれへんけど。」

と、静かに言いました。村人は橋を見つめて決心しました。

その間も雨は降り続いて

いました。

保近は、

「みんなでやるしかない。

若い衆集めてくれ。」

と、叫びました。



もっこで石を担いでくる者、槌で土手をたたいて固める者と大わらわな普請が始まりました。

橋げたを補強するための大きな丸太を

「そーりゃ」「そーりゃ」

と、担いできた一団が、

「保近さまー、丸太です。」

と、叫ぶと、

「ここじゃー ここへ持ってこい。」

と、保近が答え、

「ここからつっこめー。」

と、号令をかけました。

しかし、村人たちが補強しようとしている橋げたが折れてしまいました。丸太を支えていた佐助も流されそうになりました。

「たすけー」

別の若者が佐助を掴みましたが、その若者も一緒に



流されそうになりました。保近が、

「たすけろー あぶない みなひっぱれー。」

と、叫び、

「たすけちゃれ たすけちゃれー。」

と、若者たちが力を合わせて佐助と丸太を陸にあげました。

ふるえる佐助に保近は、

「あぶなかったなあ。」

と、声をかけ、再び号令しました。

みんなで力を合わせて橋をなおそうとするけれど、水かさが増すばかりでした。みんなは川をのぞき、ため息をつきました。

「さあ、またやり直しや、位置につけ、柱打てー。」

と、保近は改めて号令をかけました。

若者たちは川に柱を立てようとしますが、水の勢いに押し流されました。

「畜生！杭の一本も打たれへん。」
と、悔^くしがる若者、

「このままやったら間に合わん。」

と、保近がつぶやきました。

そこへ、馬に乗った役人が来て、

「お行列は府中^{ふちゅう}へお入りになった。」

と、告げました。

村人は水かさが増えていく川を見

つめて、憎^{にく}らしそうに役人を見つめ

ました。



「おい里長、この橋は大丈夫だな。」

と、言う役人に、

「大丈夫なように、今、修理しています。」

と、保近が答えました。

役人は川を見て、

「帝にもしもの事があつたら、お前らみな所払い^{しよ払い}じや。」

と、言つて走り去りました。

「さあ、やるぞ 気張^{きは}れよー 縄張^{なわは}れー 杭打^{かうち}てー。」

と、言う保近の声で、

「おつ、そや。」

と、みんな、気を取り直して働こうとした時でした。

黒い水が一気に橋を乗り越え盛り上がり、村人は一

斉に逃げました。けれど、保近は橋のたもとに立つて、

「おんそらそば ていえいそわか

おんそらそば ていえいそわか

俺の命にかえて この橋 ここに留^とめたまえー。」

と、真言^{しんごん}を唱^{とな}え始めました。

橋が今にも壊れようとした瞬間、保近は身を躍^{おど}らせ

て川に飛び込むと、橋げたにしがみつき、必死で支え

ていました。

と、不思議なことに、松の木が泳ぐように橋の近くまで流れてきました。保近は、

「この橋ここに留めたまえ。」

と、その松の木を橋桁に添えた途端、水かさが一段と増え、大きく渦巻き、保近は水に呑みこまれてしまいました。しばらくして雨が小降りになり、散り散りになった村人たちが様子を見に戻ってきました。誰かが、

「おい、木が流れ着いちゃある。」

「橋にぴったり沿うてるわ。」

と、不思議がりました。誰かが、

「これはええわ。」

「板や、板を張れ。」

と、言い、誰もが自然に働きだしました。

「よっしゃ できたぞー。」

「これで渡れるぞ。」



と、橋が直り、村人が喜んでいる時、一人の若者が、

「保近さまは。」

と、言うど、みんな、あわてて

「保近さまー。」

「里長様ー。」

と、叫んで探し回りました。

「おらん。」

と、村人がうなだれて流れてきた木を見ると、木に御幣ごへいがついていました。

村人は何か不思議な気持ちになっていると、雅な音みやび樂が聴こえ、

「御帝のお通りー。」

と、言う声が響いてきました。

あわてて道をあけて土下座をした村人の前を牛車ぎしゃがしずしずと通っていきました。

帝を無事に通してほっとした村人が、

「あんた帝見た。」

「そんなん見たら、目えつぶれるやん。」

と、冗談^{じやうだん}を言い合っているよ、

「おーい、みんな来てみい。松ないぞ、弁財天の松が

ー。」

と、声がしました。

「ええっ。」

と、みんな弁財天に向かって走り

出そうとした時、雷が鳴り、稲光

が走ると、川からゴーツという音

がし、水煙が上がり、水煙の中か

ら一頭の竜が踊り出ました。竜の

背中にはむくろとなった保近を抱

えて弁財天が乗っていました。

「おお里長様。」

「保近どの。」



村人はみなひれふしました。そして、

「おんそらそば ていえいそわか

おんそらそば ていえいそわか」

と、真言を唱えました。その真言に送られて茅渟^{ちぬ}の浦に竜が消えていきました。

それからは 岸の和田に住む

人たちは ちからあわせて

弁財天 祀り祈って

橋まもり 田を耕して

末永く 実りゆたかに

ほがらかに 暮らしたそうな

岸和田の むかしむかしの

話です

